

道徳 ジャーナル

127号

- 21世紀 心の時代に
「がんで伝える」がん教育
上野創……………1
- 道徳授業 私の実践
・教材吟味を通して児童と共に学ぶ道徳授業
佐藤淳一……………4
- ・子ども主体の道徳授業を目指して
～斉授業から自立的な学びへ～
細野貴寛……………6
- 浅見先生に相談です！
自分事として考える授業とは？
浅見哲也……………8
- どうなるこれからの道徳授業……………10

21世紀



の時代に

「がんで伝える」

がん教育

はじめに

「がん教育」を知っていますか？ 今の子どもたちは、主に保健体育の授業で「がん」について学ぶきまりとなっています。

小学校では二〇二〇年度から全面実施となり、中学校高校はそれぞれ翌年、翌々年度から必修となっています。

つい最近のように感じますが、実は文部科学省で「がん教育」の議論が始まったのは、二〇一二年のがん対策推進基本計画に盛り込まれたのがきっかけ。つまり全面実施から八年も前のことでした。

厚生労働省の協議会で提案されたのがきっかけでした。議論の末、がんの基本計画に、〈健康と命の大切さを学び（中略）がんの正しい知識とがん患者に対する正しい認識をもつよう教育することを目指す

す」と明記されたのです。

私は「がん教育」に関心を持ち続けています。理由は、一九九〇年代後半から学校での「いのちの教育」に注目してきたためであり、自分が二十代でがんを経験したためです。

二十六歳でのがん体験

新聞記者になって事件や災害の取材などに明け暮れる日々を送っていた私が、精巣腫瘍というがんの告知を受けたのは一九九七年、二十六歳のときのことでした。両肺全体に散らばった「進行がん」の状態で、手術では対処しきれず、入院して抗がん剤治療をすることになりました。全身に広がったがん細胞を、薬だけですべて無くせるのか、医師にも分からない状態でした。まさに青天の霹靂^{へきれき}。予想もしない事態に心は混乱し、三十歳になることもなく死ぬ



朝日新聞記者
うえ の はじめ
上野 創

のだろうか、ということが頭をよぎりました。

治療は吐き気などの副作用が激しく、それが原因で命を落とすのではないかと思うこともありましたが、髪が抜け、皮膚が黒ずみ、体重が十キロ減りました。先が見えない、努力しても事態を変えられるものではないという現実はとても重いものでした。精神的に不安定になり、うつも経験しました。

今と違い、当時の抗がん剤治療は入院が前提でした。存分に働けること、人と会って話ができること、好きなものを食べられること、家族や友人と過ごす時間。そうしたものが、どれほど貴重でありがたいものなのか、初めて意識しました。裏を返せば、それまではどこか日常を浪費していたのではないかと感じました。昨日と同じように今日が来るのは当たり前で、明日もその先も当然のように続いていく、そう思っていました。人はいつか死ぬと分かっている、今日を意識し、今を大切に思ったり感謝したりということは全くありませんでした。

それまでの自分の姿勢を「もったいなかったな」と思いました。大切なものの価値を、失うときに知るなんて。そして、これほど大事な「命」や「死」について、子どもも大人も、病気をせずとも考えてみる機会があればよいのにと思うようになりました。

調べていく中で、「デス・エデュケーション」「死への準備教育」などを広めている上智大学教授のアルフォンス・デーケンさんの活動を知り、会いに行つて話を聞きました。それ以外にも、学校で「いの

ち」をテーマとして取り上げている方々を訪ね歩き、記事を書きました。

いのちの教育への関心

二〇〇〇年代に入ると、「死にたい」と言ったり、自傷行為をしたり、自殺を図ったりする子どもの存在が問題になりました。自尊心、自己肯定感という言葉も見られるようになりました。

教科の学習は大事だけれど、生きづらさを抱える子どもたちにはそれ以外のことももっと伝えたいほうがよいのではないか。ただし、安易に「命を大事に」と言っても伝わらない中で、どうすれば真剣に考えてくれるだろうか……。

そんな声も上がる中、自分や家族ががんを経験し、「生きることや、いのちについて子どもたちに伝えたい」と考えて「いのちの教育」に取り組む人が出てきました。がんを経験した教員や管理職の中にも、子どもたちに「周りの人たちと支え合って生きることの尊さ」や「ちっぽけな一人の人間の存在の素晴らしさ」を伝える人がいました。

これとは別に、がんという病気をめぐる環境や意識も変化していきました。例えば差別的な扱いや視線を怖がって「隠すべき病気」と考える人が減っていききました。治療成績の向上で、「必ず死ぬ」というイメージは薄まり、「生涯で二人に一人はかかる身近な病」という受け止めも強まりました。

がんをわずらった後をどう生きるか、という視点も注目されるようになりました。

知識偏重にしないための外部講師

こうした状況の中で、「子どもたちも、予防や検診の大切さを含めてがんの基本的知識を知っておくべきではないか」「がん患者の心理を知り、差別を防ぐ取り組みが必要」といった考えも広まりました。こうして、国の対策協議会で「がん教育」が議論されるようになっていったのです。

以前からがん教育に取り組んでいた人たちが心配したのは、必修化などにより、知識だけを伝える無味乾燥な授業が増えるのではないかとということでした。単に知識としてがんにつながる数字やファクトを記憶させ、テストで○×を付けるようながん教育では意味が無いと心配していたのです。

他方、学校側からは、非常に忙しくなっている先生たちが、専門でもない「がん」について教えることが負担になるのではという声がありました。

こうしたことから、文部科学省も、がん教育の実施にあたっては、医師や看護師、患者経験者、家族遺族に「外部講師」として参加してもらうことを推奨しています。文科省は先進事例やガイドラインを示して、外部講師の活用を後押ししてきました。

医師や看護師だけでなく、学校に協力しようと、「がん教育」の講師育成や質の向上に取り組む患者

団体も各地にできました。

子どもたちに話す難しさ

実は私自身も、がんを体験した外部講師として公立高校などに呼ばれ、話をすることがあります。文部科学省や国立がん研究センターなどが公表している資料を活用しましたが、実際にやってみると何をどう伝えるか、迷いに迷いました。

「がんは怖い病気なのか」「がんで人は死ぬのか」「がんは予防できるのか」と問いを立ててみると、イエスでもノーでもあります。

十八歳以下でがんになる確率はとても低いこともあり、「自分事」と思っただけ聞いてもらつことや、過度に怖がらせることなく思いを伝える「さじ加減」を難しく感じました。本番では、がんの現状や予防について話すとともに、死を突きつけられて思つたこと、家族や友人への思い、病を通して大きく変わった価値観などを語りました。

若い世代を意識し、「人は他人と自分を比べて生きる意味を見失つたり、生きるのがつらくなって死になつたりすることもある」という話もしました。それは異常なことではないとしたうえで、生き抜けば必ず開けていく道があること、大人になるにつれて大変さとともに楽しさが拡大したことなども率直に話しました。

「今、つらい人もいるでしょう。想像できないかも

しれないけれど大人になると、もっと自由になり、もっと楽しい瞬間が増えます。私は二度と、世界も視野も狭く、人間関係やささいなことに悩んでいた中高生時代には戻りたくありません」と言うつと、生徒たちは驚いた表情をしていました。そして、いろいろな感想を書いてくれました。

「患者の数だけ違いもあると知った」「日ごろから日常に感謝して生きたい」「がんでも社会復帰できるんだと分かった」「予防や検診を大切にしたい」……。

「とても怖いと感じた」「若くてもかかると知らなかった」などの率直な声もありました。

「これは私のケースで、人によって違います」と何度か伝えましたが、内容がシビアな分、話すのはやはり難しいと感じました。



都内の小学校から、がん教育の講師として招かれて子どもたちに話すNPO法人「がんサポートかごしま」の三好綾理事長。団体の仲間たちと、がん教育の講師育成や、学校、教育委員会との調整などを続けている。

がん教育は「がんを教えるのではなく、がんで教える」「生きること伝えたい」と自身の心構えを話してくれたのは、鹿児島でがん教育に取り組んでいる乳がん経験者の三好綾さんでした。教える、というより、いのちのことや自分の存在の大切さを伝えたいという思いを語っていました。子どもたちに何を話すかを練るうえで、指針になりました。

教育のプロ、先生たちへの期待

学校の先生たちに伝えたいことがあります。

子どもたちにとって、学校に外からゲスト講師が来て真剣に語りかけるというのは新鮮な経験です。普段はあまり正面から取り上げられない「生と死、病」をめぐる話を、知らない大人が熱意を込めて伝えてくれる点も貴重だと思います。とはいえ、ゲストは一過性の「教材」です。教員の皆様は教育のプロとして、ぜひ事前・事後の授業でその「教材」を存分に生かしてほしいと思っています。

がん教育は保健体育の授業で年一コマという学校も多いようです。多忙な教育現場には酷かもしれませんが、医療者やがん経験者らとタッグを組んで、二コマか三コマ、試みてほしいと思っています。

文部科学省の調査によれば、道徳の時間に取り上げる事例もあります。皆様の学校でも、ぜひトライしてみてください。

(つえのはじめ)

道徳授業私の実践

教材吟味を通して

児童と共に学ぶ道徳授業

はじめに

授業は児童が学習することを目的としている。教師は児童に全てを教えているわけではない。もちろん児童より人生経験や知識などがあるため、知識の伝達や共有をしている。しかし、その役割はいずれインターネットの情報やAIに取って代わられるかもしれない。教師一人が持てる知識は限られているし、全てを専門的に把握しているわけではない。授業は学ぶ場であるため、児童だけでなく教師も学ぶことが

大切である。教師は、児童から学び、児童と共に学び、そして教師が学ぶ姿勢を見せることで、児童が自立して学んでいく、と私は考えている。

道徳の授業では、道徳的価値に関する児童の問題意識や、教材との出会いによって生まれた考えなどから、児童と話し合い、児童も教師も互いの価値観を示し合い、学び合い、児童がそれぞれの答えである価値観を見いだしていく。この学びの過程をいかに促進できるかが教師の大きな役割である。道徳では特に、児童から学び、共に学ぶ必要があると考える。



東京都町田市立
相原小学校教諭

佐藤 淳一

教材吟味と授業プラン

私は、教材吟味の際、児童の問題意識や教材に対する思いを抽出し、授業プランをいくつか用意する。実際の授業を行う際は、その場の流れに合ったプランを選択し、授業を進める。児童の実態や学級の様子、話し合いの展開によって、柔軟に対応できるようにし、授業の可能性や選択肢を広げていく。こうすることで、授業の可能性は広がり、それぞれの学級や児童に合った個別最適な授業になると考える。

○ **主題名** 友だちのために

○ **内容項目** 友情、信頼

○ **教材名** 「二つの 小鳥」

○ **ねらい** 友だちのことを考えて、できることを考え、友だちのことを大切に思う気持ちを育む。

① **時系列的な教材吟味**

みそさざいがやまがらの家に行くときの気持ち、友だちへの思いが最も高まった瞬間だと言えるので、時系列的に吟味すると中心発問は、「みそさざいさんがやまがらさんの家に行こうと思ったのはどうしてだろう?」となる。一方、みそさざいが迷っている場面は、友だちのことを思う気持ちが表れているため、みそさざいの気持ちを整理するために「みそさざいさんはどうして迷っているのかな?」も有効な発問である。

② **構造的な教材吟味**

この教材では、みそさざいが、友だちのうぐいすか、やまがら、どちらを選ぶのか、その葛藤場面が印象的である。選択を迫られるみそさざいだが、児童が自己投影していく際に、それぞれの条件の何を大切にすることが明らかになり、友だちを選ぶ基準が現れてく

る。ここで多様な考えについて話し合えば、児童それぞれの「友だち観」を磨き合うことにつながる。

だが、ひとりぼっちのやまがらのために家を訪れるみそさざいの気持ちの原動力が何かを考えさせることで、友だちを思う気持ちについてより深く考えさせられる。そこで、葛藤ではなく、みそさざいの行動の根拠となる原動力について話し合い、今後の「友だち観」を育むことにつなげたいと考えた。そこで、中心発問を「みそさざいさんになって、やまがらのさんの家に行く理由を話し合おう。」にして、「もし自分だったら、やまがらのさんの家に行くか、うぐいすさんの家に行くか教えてください。」と投げかける展開を考えた。役割演技を取り入れながら児童の「友だち観」を話し合い、改めてみそさざいがやまがらを選んだ理由を話し合い、友だちを大切にすることを大切にしているそれぞれ考えさせたいと思った。

③ 児童の視点に立った教材吟味

児童は、みそさざいとやまがらが本当の友だちという印象を受けるだろう。みそさざいが最終的にやまがらを

選んだことにより評価をするのではないか。その場合みそさざいの行為のよさはどこにあるのか問いかけると、友だちに対して自分ができることや大切にすべき思いについて話し合えるのではないか。また、みそさざいとやまがらが本当の友だちなら、なぜ本当の友だちと言えるのか考えることが大切である。この教材を通して、友だちへの思いを明確にする意図を持って、導入から「よい友だちとは何だろう。」とテーマを提示し、教材を読んだから「よい友だちを見つけよう。」と投げかけ、中心発問を「みそさざいさんとやまがらさんが友だちだと思つところはどんなところだろう。」として教材全体を捉えた発問構成にすれば、一貫して「よい友だち」について深く考え、話し合えるのではないかと吟味した。

授業の実際

導入では、児童の友だちについての問題意識を知りたかったので「よい友だちとは？」と発問をして、それぞれの友だち観を共有した。教材を読んだ感想から、①やまがらが迷っているこ

とと、②なぜみそさざいはやまがらの家に行ったのかが問題になった。そこで自己投影的発問として「みそさざいさんは何を迷っているのか、みそさざいさんになって話そう。」と投げかけた。音楽会の練習をそつと抜け出そうとするみそさざい役の児童に「どこに行くの？ どうして行くの？」と問いかける。「やまがらのさんの家。」と答えた後に、みそさざいがやまがらの家に行く気持ちを話す。ここでとても盛り上がり、それぞれがみそさざいになりきって話していた。「音楽会の練習があるのに行くの？」と尋ねると、みそさざいの気持ちを考えたいという流れになった。そこで、やまがらの家へ行くみそさざいの気持ちを、時系列に沿って問い、友だちを大切にすることを問う展開に切り替えた。「みそさざいさんはどんな気持ちを大切にしていますか。」を中心発問として、導入にもつながる「友だちを大切にしたい。」について話し合い、共有した。

終わりに

教材吟味は、児童の思いを予想し、

教師独りよがりではない、柔軟な授業をするために不可欠である。よく吟味した結果、授業でも多様な発問を構成できて、児童と共に学ぶ授業になると考える。今後も教材吟味を重ね、よりよい授業づくりを目指したい。



(さとう じゅんいち)

道徳授業私の実践

山梨大学教育学部
附属小学校教諭

細野貴寛

子ども主体の道徳授業を目指して 一斉授業から自立的な学びへ



はじめに

私が勤務する山梨県では、「自立した学習者の育成」や「子供主体の授業への教育観の転換」を掲げた教育振興基本計画が示されており、これらは授業づくりの根幹として重視されています。今後、子どもたちは、「正解のない課題」と向き合いながら生きていくことが求められます。変化の激しい社会の中で、自分なりの問いを持ち、仲間と対話を重ねながら納得解を見いだしていく力が、これまでに以上に必要に

なると感じています。

私は、こうした力を育てる場として、道徳授業に大きな可能性を感じています。一方で、これまでの私の授業は、一斉一律のペースで進み、子どもたちが教師の発問に答えることに重点が置かれがちでした。もちろん、教材研究を丁寧に行い、問題意識や子どもの思考の流れを想定し、学びの文脈に沿った授業構想に努めてきました。しかしその中で、一人一人がじっくりと考えを広げたり深めたりする「余白」が十分でないと感じる場面もありました。だからこそ、これまでの道徳授業

の在り方を見直し、「共に考え続ける場」として再構築したいと考えました。

本実践では、自立的に学ぶ姿を引き出すための単元構成と授業のデザインについて紹介します。

授業の概要

- **主題名** 二つの教材文から考えるよい友達関係とは？ 〈教材①「友達だからこそなやむこと」・教材②「ロレンゾの友達」〉
- **内容項目** 友情、信頼
- **教材名** 「ロレンゾの友達」（『新版

みんなの道徳 6『学研』

○ **ねらい** アンドレ、サバイユ、ニコライの言動からよりよい友達関係について追究する過程を通して、友達と互いに信頼し、よりよい人間関係を築いていこうとする道徳的判断力を育む。

●子ども主体の道徳授業とは

私は、「子ども主体の道徳授業」とは、子ども自身が道徳科の見方・考え方を働かせながら、学習過程そのものを自ら回していく授業であると捉えています。「自分との関わりで考える」「多面的・多角的に考える」といった見方・考え方を土台にしながら、自ら問い、考え、自己決定を繰り返していくことで、従来の単線的な授業展開ではなく、一人一人の思考の流れが複線的に広がっていくような学びの姿が見られるようになります。

1、二時間を通じたユニット構成

子ども主体の学びを目指す道徳授業では、子どもが「学習課題・学習過程・学習形態・ペース・ツール」を自ら選択し、調整しながら学びを進めることが重要です。そのため、四十五分単位で完結するのではなく、単元全体で資質・能力を育てる視点がより求め

られます。本実践では、「二つの教材文から考えるよりよい友達関係とは？」という大テーマを設定し、教材①「友達だからこそなやむこと」と②「ロレンゾの友達」で二時間をかけて友情、信頼について深く考えるユニッツ学習を構成しました。

2、立場を選択することで生まれる多様性と対話

二時間目の本時では「もしも、自分がロレンゾの友達だったらどうする？」という問いを設定しました。具体的には、①アンドレ②サバイユ③ニコライ④その他の選択肢を提示し、自分ならどの立場を選ぶかを考えさせました。この問いを通して、子どもたちは主體的に思考し、多様な立場での理解を深めることができます。さらに、友達の選択との「ずれ」が生じること、対話が活性化し、学びの中に「交流の必然性」が生まれました。

なお、この問いは、大テーマ「よりよい友達関係とは？」に迫るための問いとして位置づけ、子どもたちにもその目的と役割を明確に共有しました。

3、探究のサイクルと見通しの共有

子どもが自立的に学ぶためには、

「どのような過程で学ぶのか」「どのような学びの姿をゴールとするのか」といった見通しや目標の共有が不可欠です。実践では、学びの流れを視覚化し、自分かどの探究過程を進んでいるのかを意識できるよう工夫しました。これにより、子どもたちは学習過程を意識しながら、自らの学びを調整し、より深く思考を深めていく姿が見られるようになりました(図1)。



図1 探究サイクル

授業の実際

【導入】

前時での学びや振り返りの記述をスライドで一斉共有し(図2)、比較し

ながら大テーマについて考えていくことを確認しました。その上で、本時の問い「もしも、自分がロレンゾの友達だったらどうする？」を提示し、自分かどの立場に近いのか選択しました。



図2 導入で示したスライド

【展開】

クラウドツールのFigJamのセッションに自分の考えを整理しました(図3)。他者の意見を参照しながら、交流相手を選択し対話すると、前時の学びと比較する姿が多く見られました。『友達だからこそなやむこと』の場合では、友達として素直に伝えたり関わったりできるけれど、今回の『ロレンゾの友達』では、友達として関わ

りにくい」などの発言に表れているように、子どもたちは二つの教材の相違点や類似点を比較しながら、それぞれの登場人物の在り方について考えを深めていました。また、前時の振り返りをクラウドで参照し、「以前はくだと思っていたけど」と考えを変容させる様子も見られました(図3)。



図3 FigJamのセッションと交流場面

【終末】

自分の対話が収束してきたタイミングで、二時間の学びをスプレッドシートに整理していく姿が見られました。(ほその たかひろ)

浅見先生に 相談です!

第5回



十文字学園女子大学教授

自分事として考える授業とは？

子ども自身の体験を引き出して「読み取り道德」から脱却しましょう。

浅見哲也



マンガ・春原弥生



道徳科と国語科の違い

道徳が特別の教科となる以前の道徳の時間では、登場人物の心情理解のみに終始するような授業、いわゆる「読み取り道徳」が課題として指摘されていました。果たして今日の道徳科の授業では、この課題は改善されているのでしょうか。

道徳科では「自我関与」つまり、ある事柄を自分のもの、自分に関係があるものとして考えることが不可欠です。しかし、教材に登場する人物等の気持ちを読み取って、自分事として考えることはできません。国語科でも道徳科でも、読み物等の教材を活用して学習をしています。子どもたちはその違いを受け止めて学習をしているのでしょうか。教師も子どもたちも違いがよく分からないまま授業をしていたら、おそらく国語に近づいていくように思います。それは、文章表現を根拠に、登場人物の気持ちや考えを捉えていき、教材そのものを深く理解していくということです。

一方、道徳科では、その時々で気持ちや考えは、文章表現から読み取るのではなく、自分のさまざまな体験を根拠にしていきます。そして、授業でたどり着くのは教材理解ではなく自己理解です。その授業でねらいとする道徳的価値について自己を見つけたときに、自分の成長を実感したり、課題や目標を見つかったりすることです。これが道徳科の学

びと言えます。

自分事として考えるための発問の工夫

自分事として考えられるようにするために、授業ではさまざまな工夫ができます。その一つは、主に導入の段階で、日頃の子どもの生活や事前のアンケートの結果等から、自分自身の問題として受け止められるようにすることです。このことは前号（126号）で触れました。

自分の問題を少しでも解決できるようにするために、教材を活用して話し合っていきますが、教師の発問や子どもたちの発言等の受け止め方によって、読み取りになり、他人事になってしまうことがあります。だからこそ、発問の意図をしつかりと考えながら子どもたちの発言等を傾聴することが大切です。道徳科の学習指導案の学習指導過程に表記される「指導上の留意点」に次のような表現が見られます。

登場人物の気持ちに共感させる。

この言葉の意味を考えると、登場人物の気持ちを読み取るという意図に見受けられます。もし、本当に読み取ろうとしているのであれば、それは道徳科の学びとは言えません。道徳科では自我関与する必要があるからです。ですから、正確に言えば、

登場人物に共感して自分の気持ちを考えられるようにする。

ということになるのです。登場人物が立たされた状況に自分を置いてみたら、自分はどのような気持ちになるのかを考えるとということです。

もう少し具体的に考えてみたいと思います。例えば、教材『手品師』において、友人から大劇場への誘いの電話がかかってきた場面です。ここで子どもたちに考えさせたいことは、手品師の迷いではなく、子ども自身の迷いであり、簡潔に言えば、自分のことと相手のこと、どちらかを優先させるときの気持ちを考えるということなのです。

ですから「友人からの誘いを受けた手品師は、どのような気持ちでしょうか」と発問するだけでなく、「自分の目標と相手との約束のどちらかを選ぶとき、どのようなことを考えるでしょうか」と発問してもよいのです。発問では「手品師は」と登場人物を主語にすることが一般的ではありますが、より自我関与できるようにするために、発問の言葉を工夫することもできるのです。

さらに、発問の内容は、登場人物に重ねた子どもたちの気持ちや考えだけでなく、道徳的価値について考えることも必要です。例えば、教材『雨のバス停留所』では、「よし子はお母さんの横顔を見ながら、どのようなことを考えたのでしょうか」と発問するだけでなく、「きまりは何のためにあるのでしょうか」と道徳的価値を直接問うということです。このような発問をしていくと、子どもたちは自然に教材から離れて、自分の経験から感じたことや考え

たことを表現していきます。つまり、その気持ちや考えは、教材の中だけのものではなく、自分の生活において汎用的に生かせるものになっていくのです。

子どもたちの実態の捉えは導入のみで終わらせない

よく導入では、子どもたちの実態から問題意識を持てるようにします。その後、教材を活用して話し合っていくと、その実態とは異なる前向きな気持ちや考えが出てくる場合があります。それは、よいことが知的には理解できているからです。しかし、それでは本当の自分事にはなっていないかもしれません。そこで、主に教材を活用する展開の段階においても、時には子どもたちの実態に立ち返り、教材の状況と重ねて考えられるようにするのも効果的です。「それがよいことだと分かっているながら、どうしてもなかなかできないのでしょうか」と問うと、教材の登場人物に入り込もうとした子どもたちは我に返り、自分の弱さを再確認しながら、よりよいものを見つけようとしていきます。

子どもが常に自我関与して考えられるようにしようという教師の意識があれば、発問の仕方や子どもの発言等の受け止め方も変わるものです。教材を読み取り、自己を見つめて自我関与させるのは最後だけ、という授業から脱却していきましょう。

（あさみ てつや）

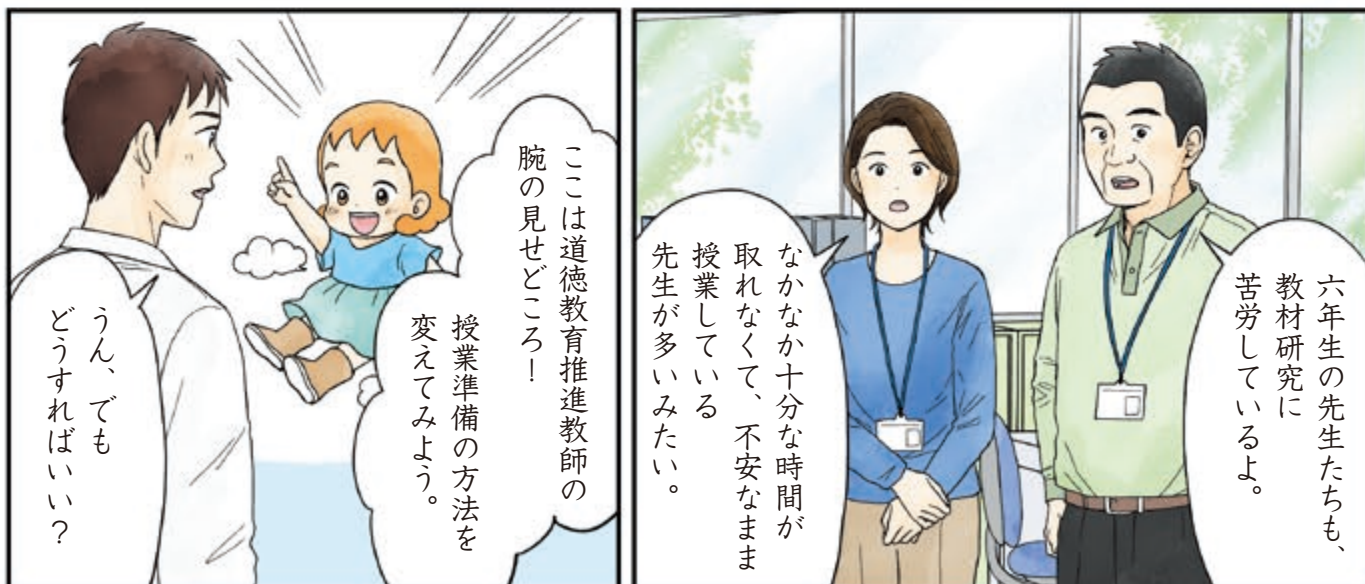
どうなるこれからの道徳授業

道徳教育推進教師編 その3

とくちゃん

監修・廣瀬仁郎 法政大学兼任講師
マンガ・のはらあこ

学先生





『どうなるこれからの道徳授業』が本になりました!!

マンガでわかる道徳

すぐできる ずっと役立つ **基礎・基本**

編著

廣瀬仁郎（法政大学兼任講師）

浅見哲也（十文字学園女子大学教授）

永田繁雄（東京学芸大学教授）



A5判・144ページ 定価：1,980円（本体1,800円＋税10%）

品目コード：2380252900 ISBN：978-4-05-802529-1

ご注文は貴校担当のGakken特約販売代理店へお願いいたします。全国の書店、ネット書店でもご購入いただけます。

商品

ページは
こちら！



道徳ジャーナル127号 令和7年11月発行

発行所 株式会社Gakken 発行人 竹重純二 編集人 木村昌弘

本誌のお問い合わせ先…小中教育事業部 〒141-8416 東京都品川区西五反田2-11-8

内容については…TEL (03) 6431-1565 (編集) それ以外のことは…TEL (03) 6431-1151 (販売)

「学研 学校教育ネット」 <https://gakkokyoiku.gakken.co.jp/> ●『道徳ジャーナル』のPDF版はWEBページから。

9300010771



これからも
ずっとともに、
80周年。

Gakken